九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

馬琴の「水滸伝」観の形成と読本執筆

菱岡, 憲司
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/19766

出版情報：語文研究. 106, pp.26-43, 2008-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

馬琴の「水滸伝」観の形成と読本執筆

菱岡憲司

はじめに

中村幸彦氏は、馬琴読本の序跋・附言、また随筆や書簡、批評における言辞を主たる考察の料として、中国白話小説及びその批評に影響を受けながら形成された馬琴の小説観を究明した。[注1] また濱田啓介氏は、近世における小説評論史という大きな流れを叙述するなかで、馬琴の「水滸伝」観（以下「水滸観」）の変遷を詳しく論じた。[注2] それにより、馬琴の水滸観・小説観の理論的変遷の大概は判明したものの、序跋等、馬琴の直接的言辞からうかがえる理論と、実作たる読本・合巻等の趣向・物語構成とが、どのような影響関係にあるのかについては、必ずしも活発に議論されていなかった。本稿では、馬琴の水滸観の形成を追いながら、読本執筆という実践が、その理論にどのような影響を与えているのか、また反対に、水滸観が読本にどう反映されているのかを見ることで、馬琴創作の理論と実践をあきらかにしたい。

一、「詰金聖歎」に至る馬琴の水滸観の変遷

馬琴がまとまったかたちで「水滸伝」に対する見解をあらわしたのは、『新編水滸画伝』初編（文化三年刊）[注3]の「訳水滸辯（すいこをやくするのべん）」がはじめである。そのなかで馬琴は、「水滸伝」の評者金聖歎が、七十回までを施耐庵の作、以後は羅貫中が継いだとして、七十回以降を切り捨てたことに触れ、「『続文献通考』に、羅貫中、「水滸伝」を作りて世を誣（しひる）の報

ひ、三世の子弟みな唖なりけるよしを載」ているが、金聖歎の言うように施耐庵・羅貫中がともに「水滸伝」の作者であるなら、どうして羅貫中だけが天罰を蒙ったのかと疑問を呈する。

また馬琴は、「聖歎が外書取べき事あり、又取べからざることあり」と聖歎評にさらに四つの不審をたてたうえで、施耐庵の「自序」なるものは金聖歎の偽作だと見破る。その検討は目加田誠・白木直也・濱田啓介・神田正行各氏によってなされており[注4]、濱田・神田両氏により、右の金聖歎批判の多くは、馬琴が所持する『忠義水滸伝』旧蔵者の書き込みを利用したものであることが指摘される。いまは、文化三年前後の馬琴は、他説に便乗するかたちで、七十回までが本来の「水滸伝」とする金聖歎の説に疑いを抱きつつも、この時点では確たる反論を形成するにはいたっていないことを確認しておく。

『新編水滸画伝』発刊から十五年後の文政三年、馬琴は『玄同放言』第二集を上梓し、「詰金聖歎」において金聖歎の七十回本を否定する。

聖歎といふとも、亦よく小説を見たるものにはあらず。何となれば、第七十回、忠義堂石碣受天文、梁山泊英雄驚悪夢、といふ条に至て、一部の結局とするものはたがへり。はじめに洪信が石碣を披きて、魔君を奔せしにより、一百八人の豪傑出現し、後に石碣天降て、魔君を収めたるにより、宋江等一百八賊、その本然の善に帰して、国の為に賊を討、奸を鋤に至れば、こゝまでが趣向の半体なり。必しも石碣の天降しをもて、結局とすべからず[注5]。

先の「訳水滸辯」では、金聖歎の七十回本説に疑問を投げかけるにとどめていたが、ここにいたって馬琴は、宋江以下百八人が「本然の善」に帰して朝廷の招安に応じ、遼・方臘の賊を討伐する箇所、すなわち七十回以降（百回本・百二十回本の七十一回以降）が不可欠であるとの考えを表明する。

この馬琴の水滸観に言及するとき、見逃すことができないのは、この「詰金聖歎」をあらわした時点でも、馬琴は「水滸伝」を全面的には肯定していないことである。馬琴は、金聖歎が李逵を褒め宋江を貶めていることに反駁する過程で、「水滸伝」は「勧懲には甚遠かり」との見解を示す[注6]。同時に「人情を尽すが如きは、寔に小説の巨擘なり」とも述べることから、この水滸観の背景に、公道と人情の両立をめざす、馬琴の小説作法が密接に関係していることがわかる。

公道人情両是非　人情公道最難為
若依公道人情欠　順了人情公道虧

との『占夢南柯後記』（文化九年刊）中の四句[注7]は、文化七年刊の『夢想兵衛胡蝶物語』前編巻之三の挿絵にもほぼ同じものが見受けられ[注8]、文化年間の馬琴の小説観が知れる言辞として多く言及される[注9]。

これは、もとは『金瓶梅』四十九回の「公道人情両是非／人情公道最難為／若依公道人情失／順了人情公道虧[注10]」より出るが、直接的には、徳田武氏が指摘するように[注11]、都賀庭鐘編『漢国狂詩選』（宝暦十三年刊）に拠っていることが、語句の異同よりあきらかである[注12]。

「公道」「人情」の両立を目指すという、文化年間における小説作法を了解したうえで、「詰金聖歎」に示された馬琴の水滸観をみると、宋江等が「本然の善」に帰して朝廷に帰順する七十回以降が不可欠であるとの見解は、「人情を尽」すことにおいて「小説の巨擘」たる「水滸伝」に、「公道」たる勧善懲悪を読み取ろうとする営みであるといえる。

「喜怒哀懼愛悪欲」の七情たる人情を描くには、人間の欲（人欲）を描かねばならない[注13]。当然、「潔らぬ筋」になることは避けられず、実際「水滸伝」の趣向レベルでは、馬琴からすれば「善悪正しから」ざるものもすくなくなかった[注14]。

戯作者である馬琴の水滸観は、ただ「水滸伝」をいかに解釈するかにとどまらず、自己の小説作法と密接に関係しているのであり、「水滸伝」に勧善懲悪を読みとる営為にも、悪の描出をどう倫理的に価値づけるかという自己の執筆活動と地続きの問題意識がつねに底流している[注15]。その後の馬琴を知る立場にある我々は、馬琴が「初善中悪後忠」という水滸観（以下「水滸三等観」）を「発明」し、趣向レベルでの悪の描写も、最終的な勧懲を描くためには否定するに足らないとの論理を獲得したことを知る。しかし「詰金聖歎」をあらわした段階では、まだ趣向・筋における悪の描写は「勧懲には甚遠」いとの考えであった。

だが同時に、「水滸三等観」につながる萌芽もやはり「詰金聖歎」に見受けられる。それは他でもない、宋江等が「本然の善」に帰す箇所を必要不可欠とする、金聖歎の七十回本批判の本筋である。そしてこの論理は、『玄同放言』第二集の二年前に出版された、『犬夷評判記』（文政元年刊）ですでに公にされている。

すべて小説は、文面に、仮話あり。文外に話説あり。これを見あやまるときは、その評的らず。抑伝奇稗説は、実録とうらうへにて、話説に倚伏を専文とす。譬ば「水滸伝」の一百八人は、天罡地煞の魔君也。これらが人間に出現したる為体も、亦罪犯刑余の人にて、群盗也。しかれどもその志おのづから義烈あり。彼蔡京、童貫、高

俠が、佞奸毒悪の類にあらず。こゝが作者の用心、第一なるよしは、人みなしれり。八犬士の基本も、その心操も、亦これにおなじ。百八賊の賊たるは、文面の仮話也。彼等が心操に本然の善あるは、作者の真面目也。(注16)

宋江等百八人は「罪犯刑余」の「群盗」であるが、彼らは「志おのづから義烈あり」「心操に本然の善ある」ことにより、高俅等の「佞奸毒悪の類」とは異なるとの説を馬琴は展開し、それこそが「作者の真面目」だという。質・程度の差はあれ、悪をなしたことにおいては高俅等の奸臣と等しい宋江等百八人、まさに「詰金聖歎」で「勧懲には甚遠」いと断じた彼らの所行を、「小説は、文面に、仮話あり。文外に話説あり」と、倫理とは異なる小説の基準を適応することで、「彼等が心操に本然の善ある」(注17)ことをして正当化しているわけである。(注18)

この『犬夷評判記』に見受けられる金聖歎批判として、次の箇所がよく引かれる。

さしもの金聖歎なれども、「水滸伝」を見損じて、只管宋公明を、巨盗と見て評せし故に、九天玄女が、天書を宋江に授る段に至りて、評窮れり。

なぜ馬琴は九天玄女の登場する回にこだわるのか。(注19)七十回本の第四十一回「還道村受三巻天書。宋公明遇九天玄女」において、宋江は九天玄女から天書を授かる。九天玄女はその際「汝可下替レ天行レ道、為レ主全レ忠仗レ義、為レ臣輔レ国安レ民、去レ邪帰レ正」と、のちに梁山泊の旗印となる「替天行道」「忠義双全」（ここでは「全忠仗義」）を示す。

この場面の行間評において金聖歎は、「只因二此等語一、遂為二後人続貂之地一。殊不レ知下此等悉是宋江権術、不中是一部提綱上也」と、宋江が天書を受けたのは「続貂」である、すなわちその器ではない、と後人の言に託して非難しており、馬琴はそれを「評窮れり」とする。

ここでひとつの疑問が生じる。馬琴は「宋公明を、巨盗と、見て評せし故、九天玄女が、天書を宋江に授る段に至りて、評窮れり」というが、金聖歎は終始一貫して宋江を貶めている。ではなぜその金聖歎の見解に反対するに、あえてこの箇所をもってしたのか。その疑問を解く鍵は、九天玄女が続けて述べる言葉のなかにある。

玉帝因二一為星主魔心未レ断、道行未レ完、暫罰二下方一、不レ久重登二紫府一、切不レ可二分毫懈怠一。

この九天玄女のセリフにいたってはじめて、宋江が星主であったこと、魔心を断ち切るために下界に下されたこと、そして「未」という字が示すように、懈怠なく努めて「替天行道」を完遂したのちには、天界の紫府にもどることが明かされたのである。馬琴流の物言いをすれば、宋江等は、「本然

の善」を有する存在でありながら、「魔心」を抱いたために下界に下されたが、いずれは「本然の善に帰」すことが約束された場面だと言える。それを踏まえずに宋江等を「巨盗」と断じることは、馬琴の小説観のうえからは受け入れることのできない謬説であった。

運命に流されるがごとき登場人物のなかで、超越的な視点で物語世界を見通すのが九天玄女である。同様の役割を果たす人物を、馬琴はおのれの読本のなかでも数多く登場させる。のちにその具体例を示すが、こうした超越者の存在、およびその者の発する物語世界を見通す言葉は、馬琴の小説作法においても重要な役割を担っている。(注20)

この九天玄女のくだりを根拠とした金聖歎批判は、「詰金聖歎」においても繰り返される。

聖歎云、「水滸伝、不レ説二鬼神怪異之事一、是他気力過レ人処」、嗚呼是何等の乱説ぞや。初に洪信が石碣を開きて、魔君を走らし、後に宋江が天書を九天玄女に受たる、鬼神怪異の事にあらで何ぞや。且その小説を評するに、動(やゝ)もすれば経籍史漢とならべ称し、又彼一百賊の行状得失を論ぜしは、只是夢中に夢を説なり

読本に怪異の多いことは周知の事実であり、馬琴も当然のごとく怪異を多用する。馬琴がかくまで「水滸伝」中の鬼神怪異の存在にこだわるのは、自作における怪異描出に正当性を与えるためであることはもちろんであるが、さらには、ここで馬琴が指摘する「初に洪信が石碣を開きて、魔君を走らし、後に宋江が天書を九天玄女に受たる」箇所は、智真長老が魯智深に四句の偈を授ける箇所と並んで、「水滸伝」全体の構成と関わり、その後の展開を暗示するはたらきをしていることも見逃せない。しかしいまは、「水滸伝」と怪異の関係を、おのれの小説作法に引きつけて論じていることを確認し、ここでも小説執筆という行為と水滸観の関係の深さが看取されることを指摘するにとどめる。

二、馬琴の水滸観と〈もどり〉

いま『新編水滸画伝』(文化三年刊)「訳水滸辯」において、金聖歎の説に疑問を抱きつつも、確たる反駁を示せなかったこと、『犬夷評判記』(文政元年刊)において、宋江等の「心操に本然の善ある」からには、宋江を「巨盗」と断ずることはできないと金聖歎を批判し、『玄同放言』第二集(文政三年)「詰金聖歎」で、宋江等が「本然の善に帰(リ)て、国の為に賊を討(うち)、奸を鋤(すく)」七十回以降を不可欠とする水滸観を獲得したことを確認した。以上からも『犬夷評判記』にて論じた

「本然の善」という概念が、馬琴の水滸観において重要な役割を果たしていることがわかるが、馬琴の水滸観のみをたどってきた目からすると、『犬夷評判記』の「本然の善」という朱子学的概念の援用は、唐突に思える。

筆者はこれまで、馬琴の水滸観が、小説執筆と不即不離の関係にあることを再三強調してきた。実作者である馬琴の小説観を検討するには、序文や随筆等、馬琴の直接的な言辞だけではなく、小説の趣向・物語構成と関連づけて考察する必要があることは言うまでもない。しかし馬琴の水滸観を論じる際、従来は、ただ馬琴と「水滸伝」との関係のみに焦点を絞って、馬琴の直接的な言辞を手がかりに論を構築してしまいがちであった。しかし、水滸観と小説執筆が密接に関係しているならば、その水滸観を包摂する小説観を、序文などからではなく、馬琴の実作によって裏づける作業が不可欠であろう。すなわち、「本然の善」を見出すにいたる文化三年から文政元年のあいだの水滸観の変遷は、その間の馬琴読本に繰り返される小説作法を読み解くことによってしか、あきらかにできない。

馬琴は天保十四年成「稗説虎之巻」において、自作を振り返って次のように記す。

咽喉を刺たる者、よしや窮所は外れたりとも、長物語をすべくもあらず。是等は理のなき所也。然るを文化年中までは、己も雑劇に倣ひて手負人の長物語を書たれども、いかにしても理のなき所なれば、其後はかゝずなりぬ。[注21]

文化年中の読本執筆において、馬琴は雑劇すなわち歌舞伎にならって「手負人の長物語」を書いたことを認めている。その言葉のとおり、馬琴読本には、「手負人の長物語」がかならずといってよいほど登場する。

その馬琴読本における「手負人の長物語」を詳しくみると、ほとんどが物語の終盤において、悪人、あるいは悪人の振りをしていた人物が、覚悟のうえで傷を負い、改心したこと、また悪人を装っていたことを告げる。この「実は」が開陳される場面における独白を、近世演劇では「もどり」と呼ぶが[注22]、本稿では、そうした一場面の趣向に限定せず、独白にいたる経緯を含めた趣向として〈もどり〉と仮称し、検討を続けたい。

馬琴読本に見受けられる〈もどり〉については、すでに拙稿「馬琴読本における「もどり」典拠考」[注23]で検討を行った。先の稿では、近世演劇に典拠を見出すことのできる〈もどり〉に限って検証したが、明確な典拠が確認できずとも、〈もどり〉が描かれている作品ともなると、ほぼすべての馬琴読本がそれに該当する。[注24]

結論を先にいうならば、馬琴が実作に常用したこの〈もどり〉こそ、宋江に「本然の善」を見出し、七十回以降を不可欠とする「詰金聖歎」における水滸観に影響を与えていると筆者は考える。いま、先の拙稿で行ったように、悉皆的に〈もどり〉を指摘する紙幅の余裕はない。ここでは、〈もどり〉と「本然の善」の関連の深さをうかがうことのできる例として、『新累解脱物語』を検討する。

三、『新累解脱物語』における〈もどり〉と「本然の善」

文化四年刊の馬琴読本『新累解脱物語』（五巻五冊）は、祐天上人と累の説話を原拠としており、高田衛『江戸の悪霊祓い師』[注25]をはじめ、典拠と成立に関しては多くの言及がある。今回は、〈もどり〉の考察を目的とするため、悪行をなした人物の結末を中心に見ていく。

馬琴は、大坂の書肆河内屋太助より『死霊解脱物語聞書』を贈られ「願くは先生修飾してその奇を増（ま）せ」と依頼されたことが執筆の動機だと序文で記す。馬琴が序文で触れるのはこの『死霊解脱物語聞書』と『新著聞集』中の累説話であるが、郡司由紀子氏が整理したように[注26]、累説話にはいくつかの系列があり、なかでも、随筆類に記された累説話と、『死霊解脱物語聞書』などのまとまった累説話との大きなちがいは、累を殺した与右衛門が己の罪を悔いて出家し、往生を遂げたのか、あるいは周囲のすすめで髪は下ろしたものの、心が伴わないために功徳がなかったのか、この点にある。

与右衛門も甚だ慚邪懺罪して、髪をそり、西入と改名し、単直に念仏し、延宝四年六月廿三日に終りしが、七日前より、死をしりて、称号おこたらず、聖相拝せし事共、くはしく語りて往生せしとなり。

これは累説話を収めた随筆類のひとつで、馬琴も序文で言及した一雪『新著聞集』（寛延二年刊、十八巻十八冊）における与右衛門の最期である。与右衛門は最期に改心し、往生を遂げたことが確認できる。先の郡司氏の論文でも指摘するように、『新著聞集』にある「西入」という与右衛門の出家後の名から、馬琴は『新累解脱物語』で「西入権之丞」という人物を作り出しており、馬琴が随筆類を読本執筆の折に利用していることはあきらかである。

しかし、その随筆類を承けて成立したはずの『死霊解脱物語聞書』では、与右衛門は往生を遂げない。そしてこの改変は、「祐天上人が偉大な精神力と法力を持った僧侶であることをきわだたせるため、成仏者は、執筆のそもそもより話題

の執拗な怨霊である累と助にしぼられていた」と井上敏幸氏が指摘するように[注27]、作者残寿の意図的な改変だと考えられる。

すなわち『新著聞集』と『死霊解脱物語聞書』の両書を参照した馬琴には、与右衛門が往生を遂げる、遂げないというふたつの選択肢が用意されていたのであり、馬琴は前者の結末を選ぶ。ここに、馬琴の意図を読みとることも可能であろう。

高田衛氏は、『新累解脱物語』を検討して「累説話の中心的幻想であるかさね・与右衛門という、夫婦（男女）定型を、一挙に三組作り成している」と指摘する[注28]。その三組とは、珠鶏と織越与左衛門、田糸姫と西入権之丞、累と与右衛門であり、すなわち『新累解脱物語』において、累説話の与右衛門の役割を担うのは、織越与左衛門・西入権之丞・与右衛門の三人である。

この三人のうち、与右衛門は出家したのち「七十余歳の六月廿三日に、眠るがごとく没する」。しかし悪事をはたらいた織越与左衛門と西入権之丞は、随筆類と同じく「先非を悔て改心しつつも、随筆類のように生を全うして往生することはなく、己の罪を告白して切腹するという〈もどり〉の型を示す。

彼らの臨終に際して、累説話の祐天上人にあたる烏有和尚は、物語全体を見通す超越的な立場から、謎解き、意味づけを行う。烏有和尚は、殺された思った珠鶏と田糸姫は生きていたのに、なぜ与左衛門と権之丞は祟りにあったのか、との問いに答える。

まず、その祟りは珠鶏と田糸姫の生霊のせいだとしながら、与左衛門と権之丞が祟りにあった理由を述べる。

女人の性はしうねくて、罪障ふかきものなれば、法を聞て歓ぶに似たれども、又時として過こしかたを思ひ出、煩悩の犬その身に貪縁、遂に仇におよぼすが故に、権之丞・与左衛門等、漫に惑ひ出て、いくその患苦を禀たるにあらずや。これは是生霊の祟也といへども、その原は因と果にあり。凡善人の終焉は、一念絶て礙することなし。譬ば火の滅て跡なきが如く。悪人の臨終は、邪念頓滅することあたはず。譬ば穢き物を焼に、臭香且く室の中に、残るがごとし。こゝをもて祟をなす事あり。その祟にあふもの、みづからこれに触れば也。故いかにとなれば、かの本然の善、人欲の私に覆れ、種々の悪業をなすものも、心鎮なるときは、やうやくわが悪をしる。知るといへども悔て改るに至らざれば、天かならず物に仮托してこれを罰す。

右のごとく、与左衛門と権之丞が祟りにあうのは、二人の

「本然の善」が「人欲の私」に覆われたせいであるという。この両者が改心して自殺する〈もどり〉を示すことは先に述べたとおりであるが、その〈もどり〉の根底に、「本然の善」という概念があり、そして「本然の善」が「人欲の私」に覆われたときに外在的な悪が作用する、という原則がうかがえる。すなわち〈もどり〉は、「本然の善」という概念を抜きにしては成立することができない趣向なのである。

この「本然の善」を前提とする〈もどり〉を、馬琴自ら「文化年中までは、己も雑劇に倣ひて手負人の長物語を書た」と認めるように、馬琴は繰り返し描く。馬琴の小説作法と水滸観が密接な関係にあることを認めるならば、この文化年中に多用した〈もどり〉が、『犬夷評判記』や「詰金聖歎」に見受けられる「本然の善」を前提とする水滸観に影響していると結論づけることができよう。

四、「水滸三等観」に至る馬琴の水滸観の変遷

本稿の主たる目的は、実作と切り離して論じられがちな馬琴の水滸観に、実作との関連を読みとることにある。よって、「詰金聖歎」で示した水滸観から、その後の「水滸三等観」にいたる道筋をかならずしも遺漏なくたどるものではないが、実作との関連を指摘するためにも、先人の業績にのっとりつつ概観してみる。

まず注目されるのは、白木直也氏が取りあげた、文政十年十一月二十三日付殿村篠斎宛の馬琴書簡の一節である。

一、『水滸伝』は金聖嘆評、牽強附会の説多く有之候。作者何人か定かならねども、段々に書ひろげ、末の結び出来かね候故、七十回迄にいたし、扨夢に紛らして置候物と被存候。それを、世上の見物が残りをしがり候故、別人が又続キ候て、百回にいたし候。弥行れ候故、又別人が又続ギ候て、百二十回にいたし候。弥行れ候故、又後人が『後伝』四十回ヲ作り候事と被存候。かゝれば、七十回迄、開基の作者の筆也。已来、作者三人に可有之候。[注29]

白木氏は、ここから「全水滸伝の構想」という馬琴の水滸観を読みとる。[注30] しかし濱田啓介氏は、「詰金聖歎」において示した七十回以降を不可欠とする水滸観が、馬琴の「水滸観発展の本筋」であり、右の引用を「一時思い浮かんだ寄り道」だと位置づける。[注31] これを受け、神田正行氏は、濱田説にしたがいつつ、「降迨レ若二水滸伝一、非レ乙亦成二於一人之筆一者甲也」という『松浦佐用姫石魂録』後集（文政十一年刊）の用例を加えて、右の引用を、七十回までを施耐庵の筆、以降を羅貫

中の続筆とした「金聖歎への屈服を意味する」と評する。[注32]

筆者も濱田氏の「寄り道」説にしたがうものであるが、その「寄り道」の振幅は、従来論じられているよりも大きくはないのではないかと考える。なぜなら、右の引用の一つ書きは「『水滸伝』は金聖嘆評、牽強附会の説多く有之候」からはじまるとおり、金聖歎批判の文脈で記されており、一貫して評者である金聖歎を、馬琴は創作の舞台裏を知る実作者の立場から批判しているからである。[注33]

しかし百二十回本から七十回本を編纂し、複数作者説を唱えたのは他ならぬ金聖歎であるので、もちろん馬琴の言説は矛盾している。複数作者説を唱えている以上、これを馬琴の強弁といえばそのとおりであろうが、そう断じてしまっては、金聖歎を批判するに、金聖歎の説にもとづいているかに見える馬琴の屈折した論理があきらかにできない。では馬琴は何をもって金聖歎を批判できるのか。

馬琴は七十回までを原作者の手によるとするが、七十回でその構想が完結しているとは述べない。「段々に書ひろげ、末の結び出来かね候故、七十回迄にいたし、扨夢に紛らして置」と、原作者は伏線を張り、物語を展開させていたが、「末の結び」ができない、すなわち構想を完結させることができなかったため、「夢に紛らし」たのであり、馬琴は七十回までが原「水滸伝」とするものの、構想が完結しているとは考えていない。また、はやく『新編水滸画伝』の漢文自序（文化二年）に「此ノ書終ニルサハ七十回ニ、則閲ルル者尚似タリ有ニルニ遺憾ニ」とあるように、「世上の見物が残りをしが」ったために続編が生まれたとの発想も馬琴にとって唐突なものではなかった。

実作者の立場で金聖歎批判をしつつ、どこが「牽強附会の説」なのかをあきらかにしないところからも、馬琴の苦しい立場は見てとれるが、右に述べたように、複数作者説をとることと、七十回以降を含めた「水滸伝」全体の構想を読みとることは、馬琴のなかではかならずしも矛盾していなかった。

しかしこのような苦しい立場も、複数作者説を棄てることで一貫した論理を獲得する。その変遷過程は、神田正行氏による発表がなされたため、[注34]その成稿を期して、ここでは触れない。

濱田啓介氏は、「水滸伝」に「初善中悪後忠」を読みとる「水滸三等観」は、「『傾城水滸伝』執筆を契機として文政十二年の間に成立した」[注35]とする。文政十二年刊の『傾城水滸伝』第八編の序文で、馬琴は「彼稗史なる宋江は、初は循吏、中は反賊、後に至て忠臣たり」とはじめて初中後の別を見出す。さらに第九編序では八編序を承けて「予嚮に、「水滸伝」の

趣向を評して、初中後三段の差別あるよしをいへり」と述べる。

神田正行氏は、日本近世文学会における筆者の発表「馬琴の「水滸三等観」の形成」[注36]に言及したうえで、「『傾城水滸伝』第七・八編の自序においては、個々の人物造形に見られる類型として登場した「三段の差別」が、第九編自序の中では、物語全段の趣向に関わるものとして、いわば構成論の次元で語られている。よって、馬琴が宋江らの造形に見出した「本然の善」と、「水滸三等観」にあらわれた「初善」との間には、若干の懸隔があると見ねばなるまい」と指摘する。[注37]

「本然の善」と「初善」とを同一視してはならないとはもちろんであり、その点で神田氏の指摘は首肯できる。しかしながら、あたかも人物論と構成論とに明確な違いが見受けられるかのような認識に対しては、見解を異にする。

なぜなら「本然の善」とは本質論であり、「初中後三段の差別」とは現象論だからである。馬琴が朱子学そのものにもとづいていたかは慎重な検討を要するが[注38]、言うまでもなく「本然の善」は朱子学に源を発する言葉であり、「人欲」を離れて「本然の性」（性善説を前提とするため、すなわち「本然の善」）に復すべきとの原理は、当時としては甚だ常識的なものであった。しかし馬琴はそれを小説作法、および水滸観に持ち込んだのである。小説作法と水滸観との密接な関係についてはすでに述べた。人はみな「本然の善」を有するという本質論が、現象論としてあらわれるとき、それは「初中後三段の差別」となる。本質論が常識的なだけ、おのずと現象論ばかりが注目されてきたものの、本質あっての現象であり、「本然の善」の概念なくして「初中後三段の差別」はなかった。

神田氏は第七・八編の自序までが「人物造形に見られる類型」すなわち人物論、第九編よりは構成論と弁別をはかるものの、いずれも現象論における差異ととらえるべきであろう。「本然の善」という本質論が、人物的側面に強くはたらくと「初は循吏、中は反賊、後に至て忠臣たり」となり、構成的側面に強くはたらくと「初善中悪後忠」となる。いずれも現象論であるため、それを人物論・構成論と明確に分けることはできない。

たとえば「水滸後伝批評半閒窓談」（天保二年成）[注39]において、「抑「水滸伝」に三等の深意あり。宋江をはじめとして、百八名の好漢等」と、宋江等の人物に即して初中後の構成を論じたのちに「かゝれば一百八人に、初善中悪後忠の三等あり」と述べるように、どこまでが人物論、どこからが構成論と弁別することは難しい。[注40]

したがって「本然の善」と「水滸三等観」の「初善」との間に「懸隔」を見出し、前者を人物論、後者を構成論として把握するのではなく、本質論たる「本然の善」を、現象論たる「初は循吏、中は反賊、後に至て忠臣たり」として顕現した『傾城水滸伝』第八編の序文にこそ、大きな転換点を認めるべきであろう。

水滸観のその後の展開として、神田正行氏が「『水滸伝』に関する見識の到達点」と位置づけた[注41]「水滸伝考」[注42]の分析、また『南総里見八犬伝』における対管領戦[注43]への影響を検討する必要もあろうが、本論であつかうにはいささか大きに過ぎる対象であり、いまはその用意もないため、別稿を期したい。

五、水滸観の実作への反映

さて、これまでは実作から水滸観への影響を見てきたが、最後に「水滸三等観」確立後に、その水滸観が実作にも影響を与えている例を見ておく。

「初善中悪後忠」における「後忠」とは、宋江等が「本然の善」に立ち返ったのちに、朝廷に帰順して賊を討つ箇所を指す。このことに関連して「水滸後伝批評半閒窓談」では、次のように述べる。

> 宋江等、前伝に、死するもの四十許人、竟に後栄あることなく、みな奸臣に陥れられて、果敢なく枉死したりしは、中ころ魔行の悪報にて、亦是勧善懲悪の、作者の用意こゝにあり。宋江等百八人、忠義を尽し□(アキ)賞を得ず、過半王事に死したればこそ、旧悪竟に消滅して、忠信義烈虚名にならず。世々看官に惜まるゝが、前伝作者の本意也

宋江等が生を全うしなかったのは、「中悪」における「中ころ魔行の悪報」であって、そこに勧善懲悪があるという。すなわち馬琴の水滸観は、宋江等が「後忠」で「忠義を尽し」ながらも、「中悪」の報いとして「王事に死」すことを要求するのである。

天保三年刊の『開巻驚奇侠客伝』第一集において、馬琴は客店目四郎(はたごやめしろう)という人物を登場させる。

客店目四郎は、藤白安同(ふじしろやすとも)の手先として野上著演(あきのぶ)から銅笄(こうがい)を騙し取り、著演を罠にはめようとする。しかし、自分を騙した相手にさえ温情を与える著演の心に感じて改心する。のちに、館小六(たてのころく)の藤白安同への敵討を手伝うが、悪人とはいえ旧主を討った自分は不忠であり、また追っ手を逃れるためにも身替りに死ぬ必要があると説いて、切腹する。

このプロットからわかるように、馬琴は目四郎の〈もどり〉

を描く。次の引用は、その目四郎が改心した場面である。

素より無頼の癖者なれども、人と生れて本然の、善なきにしもあらざれば、恥て頭を擡得ず。既にして著演は、慈善の心始終違はず、今その悪事を聞くといへども、きのふの事を露さで、還て術よくいひ誘へて、又その縲紲を拯ひしかば、呆るゝまでに慙愧して、且感じ且歓ぶのみ、いふよしもなくついゐたり。

ここでも「本然の善」という言葉を用いて改心のさまを描いていることが確認できる。

この目四郎の〈もどり〉が、「水滸三等観」確立以前のものと異なるのは、目四郎は改心を示しながらも、すぐには自殺しないことである。目四郎はその後、野上著演に縁のある館小六の敵討ちを手伝う。すなわち、敵討ちの助太刀という行動をもって忠義を示しており、「水滸三等観」の「後忠」にあたる箇所が、プロットとして組み込まれているのである。そして「後忠」を果たしたのちに目四郎は、小六の身替りとして自殺する。

この目四郎が自殺したことに対し、小津桂窓は「侠客伝第二集愚評」において「此目四郎は云々の訳もあり。元来不頼(ママ)徒なればいかしておいてはいかゞなればその代りに落胤をこしらへられたるもおもしろく、この落胤のある事は著演にぬひの介てふ老年の子あると照応なるべし」云々。右の評尤非也。目四郎は素是無頼の悪人なれども既に著演が義侠に悪を洗れて無垢の侠者になれり。かゝれば初の目四郎にあらず。しかるを「いかしておいてはいかゞ」とはいかなる故にやこゝろ得がたし。必是長命にて小六の幇助になすべきものなれども、小六の身替りにせねばならぬわけあるにより庶吉といふ落胤をこしらへおきてその本然の善に立かへりしを賞する也。こゝらは黙評はるかにまされり。(注44)

馬琴は桂窓の見解を「右の評尤非也」と否定したうえで、「本然の善に立かへりしを賞する」と述べて目四郎の死を忠義の死と位置づけており、桂窓の乱暴な物言いを批判する。ここには、宋江等が「本然の善」に帰して「忠義を尽し」ながらも、「中悪」の報いとして「王事に死」すことを必然とした馬琴水滸観の反映が見受けられ、だからこそ、その死の意味づけをめぐり「いかしておいてはいかゞ」と、忠義の死を理解していない桂窓の評に対して強い批判の言葉を浴びせめき立って反論する。

ているのである。

読本執筆は馬琴の水滸観の形成に大きな影響を与えた。そして右のように、「水滸三等観」成立後の水滸観が実作に反映されていることからも、両者が密接に関係し合っていることがうかがえる。

おわりに

以上、馬琴の実作と水滸観とが、互いに深く交渉していることを確認した。馬琴はただ「水滸伝」の享受者・批評者であるだけではなく、小説の実作者である。馬琴水滸観の形成に読本執筆が果たした役割を考慮するならば、序跋等に見受けられる馬琴の水滸観・小説観の理論的変遷を、読本・合巻等の実作にもとづいて検証する必要があり、それにより理論と実践の交渉の具体、また齟齬や理論倒れに陥っている箇所をあきらかにする作業が不可欠である。本稿は、先学の切り開いた道程をたどりつつ、馬琴の理論を、より実状に即したかたちで理解するためにおこなった、試みの一端である。

注

注1　中村幸彦「滝沢馬琴の小説観」『中村幸彦著述集』1、S57・11。

注2　濱田啓介「近世小説に於ける小説評論と馬琴の「半閒窓談」」『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学出版会、H5・12。

注3　「前帙見返しに「丙寅発兌」とあるから、遅れて、発刊は翌（文化）三年になったようだ」とする濱田啓介氏の見解（「近世小説の水滸伝受容私見――『新編水滸画伝』と馬琴の金聖歎批判」前掲）にしたがう。

注4　目加田誠「滝沢馬琴と水滸伝」目加田誠著作集4『中国文学論考』龍渓書舎、S60・7。白木直也「諸本研究の立場より見たる滝沢馬琴の水滸観――水滸画伝校定原本を中心として――」「日本中国学会報」21、S44。濱田啓介「近世小説の水滸伝受容私見――『新編水滸画伝』と馬琴の金聖歎批判」前掲書。濱田啓介「鹿島則幸氏蔵著作堂手沢本忠義水滸伝について」「書誌学月報」18、青裳堂書店、S60・4。神田正行「『水滸伝』の諸本と馬琴」『復興する八犬伝』勉誠出版、H20・2。

注5　振り仮名を適宜省略した。以下の引用もおなじ。

注6　「『水滸伝』は、作者の大意、草賊を賢とし、衣冠を賊とす。その筆力、人情を尽すが如きは、寔に小説の巨擘なり。後世これに加るものなし。但勧懲には甚遠かり。その趣向の立ざま、善悪正しからず、潔らぬ筋のみなれば、宋江を責、宋江を罪せんとならば、その両賊（宋江・李逵のこと、筆者注）が奸邪愚悪を、論ふにしも及ばず、「水滸伝」を廃斥して可な

り」（「詰金聖歎」）。
なお、「水滸伝」が「勧懲に違ふ」との見解は、「水滸三等観」成立直前の、『傾城水滸伝』第七編序（文政十二年刊）の時点まで見受けられる。

注7　板坂則子氏は「『占夢南柯後記』の成立」（「読本研究」10下、渓水社、H8・11）で『占夢南柯後記』の稿本を精査したうえで、くだんの四句は、執筆当初の全六巻から全八巻に巻数が変化したため、「水増し」として加筆した箇所のひとつだとあきらかにした。このことを踏まえ、板坂氏は「これだけで結論付けることの危うさは充分承知しなければならない」と慎重に断定を避けながらも「馬琴らしいとされる知識を披瀝する形での教訓には、案外、取って付けたような希薄な存在理由で、気楽に添えられたものも多いかも知れない」と考察する。筆者は、板坂氏の指摘により加筆箇所を教えられたわけであるが、枚数あわせに加筆することのできる文言からは、かえって、いかなるときでも自在にあらわすことのできる、馬琴の根本的な小説観がうかがえるのではないかと考える。

注8　「公道人情両是非／人情公道最為難／若依公道人情欠／順了人情公道虧」。

注9　水野稔「馬琴文学の形成」『江戸小説論叢』中央公論社、S49・11。服部仁「馬琴と人情」『曲亭馬琴の文学域』若草書房、H9・11。西田耕三「書評　服部仁著『曲亭馬琴の文学域』」「江戸文学」19、H10・8。

注10　馬琴が披閲した『金瓶梅』が、当時広く流通していた第一奇書本系統の本文であったことが神田正行「『新編金瓶梅』発端部分の構想と中国小説」（『読本研究新集』4、翰林書房、H15・6）により確認されるが、その第一奇書本系統（『新刻繍像批評金瓶梅（上冊）』四十九回、香港・三連書店、H2・2）にもこの句は含まれる。

注11　徳田武「馬琴読本の漢詩と『南宋志伝』『狂詩選』」『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店、S62・5。

注12　大屋多詠子氏は、「馬琴の「人情」と演劇の愁嘆場」（「東京大学国文学論集」2、H19・5。）において、近世演劇の「人情」と馬琴の「人情」との関係を、丹念に用例を追いながら、実作に即して分析をおこなった。大屋氏の検討は、馬琴創作における理論と実践との関係をあきらかにしたものとしても意義深いが、いまは深く立入らない。しかし、「公道」と「人情」の葛藤を描き、かつその両立を成し遂げるために、馬琴は「もどり」「身替り」「くどき」等の演劇的趣向の愁嘆場を設定したうえで、「公道」「人情」が両立する解決策を示していることに留意する必要がある。

注13　『夢想兵衛胡蝶物語』に、「喜怒哀懼愛悪欲の七情は、人の世の常にして、生れて静なるは天の性、感じて動くは性の慾。慾ある故に七情発る。いまだ怒らず憤らず、喜ばず楽まで、ひとり哀むものはあらず」とある。

注14　『傾城水滸伝』第七編序（文政十二年刊）で馬琴は、秦明を仲間に引入れるためにその妻子を殺す箇所を「毒悪不仁」、また宋江の父が宋江を呼び寄せるために死を装った箇所を「不孝不悌」と評する。また、板坂耀子「『傾城水滸伝』覚書」（『江戸の女、いまの女』葦書房、H6・5）における「水滸伝」と『傾城水滸伝』との比較検討により、馬琴が「水滸伝」のどこを「勧懲に違ふ」と感じていたかを看取できる。

注15　濱田啓介氏が「「勧善懲悪」補紙」（『近世小説・営為と様式に関する私見』前掲）で詳細に論じたように、本来パロディの

文脈で記されていた白話小説の序文における勧善懲悪を、馬琴は大まじめにとらえている。戯作であるからには、悪の描写も恣にすればよいものを、そうしないのは、ひとり大まじめに勧善懲悪を掲げる馬琴だからなのか、それとも時代の要請であるのか、現在のところ定見を得ない。しかし五嶋恵迪が『赤水余稿』（二巻一冊、文化七年刊）中に「馬琴論」をあらわして、馬琴が悪人の跳梁を描きながら勧善懲悪を標榜することをして「彼姦計淫行を以て天下国家を訓ずる者」（原漢文）と難じたように（平出鏗二郎「五嶋恵迪及び其馬琴論」日本文学研究資料叢書『馬琴』有精堂、S49・12）、馬琴をためらわせる空気があったことも確かであろう。

注16　中野三敏編『江戸名物評判記集成』岩波書店、S62・6。なお、一部表記を私に改めた。

注17　なお、すべての人間が生来有しているのが「本然の善」であるから、その有無を人物ごとに検討するのはおかしい。しかしここは馬琴の用法にしたがう。

注18　この『犬夷評判記』の記述は、二年後に刊行された『玄同放言』二集所収の「詰金聖歎」よりも進んでいるかに思える。これは、馬琴の水滸観が、勧善懲悪と悪人の位置づけとのあいだで揺れていたことをあらわしているであろうし、また自作を評した――中野三敏氏は、『犬夷評判記』を「自著自評の、いわば作者自らの手の内を明かして見せる小説作法の一編」（『江戸名物評判記集成』前掲、解説）と位置づける――『犬夷評判記』において、馬琴の自己肯定的な思考が反映して、『八犬伝』の創作意図の拠りどころとして引く「水滸伝」を、勢い肯定的に論じた結果でもあろうが、根本的な要因としては、濱田啓介氏が「従前の自解とは別種の評論行為であったために従前の自解を超えた成果を示した」（「近世小説に於ける小説評論と馬琴の「半閒窓談」」『近世小説・営為と様式に関する私見』前掲）と述べるとおり、評判記の体裁によった結果であろう。いずれにしても、馬琴の水滸観が、自己の小説作法と連動してかたちづくられていったことはここでも確認できる。

注19　神田正行氏は、馬琴の閲読した諸本を整理したうえで、馬琴が見た七十回本は貫華堂本ではなく、王望如序本と勾曲外史序本であるとあきらかにした（「『水滸伝』の諸本と馬琴」前掲）。ただ神田氏の博捜をもってしても、文政三年前後、馬琴がどの七十回本にもとづいてこの記述をしたかは詳かではない。

注20　この九天玄女が宋江に天書を授ける場面の重要性を認識すると、馬琴の「訳水滸辯」における「彼小説を評する毎に動もすれば聖教経伝を引く。是余がうけがたしとする一ツなり」との金聖歎批判に対しても、新たな解釈を加えることが可能になる。すなわち濱田啓介氏は、「金聖歎は果して馬琴の言う如くに聖教経伝を引く者であろうか」と疑義を差し挟んだうえで、金聖歎が経籍を引用するのは貫華堂本の「序一」「序二」「序三」「楔子評」が大半であり、金聖歎評の白眉である回評・行間評にはほとんど見受けられないことをして、馬琴が金聖歎批判の料としたのは、「序一」「序二」「序三」「楔子評」の範囲を出ないとする。しかし、厳密に検証過程を記す濱田氏の記述により筆者は気がついたのであるが、回評のうち、四十二回評は、まさしく「聖教経伝を引く」ものであり、かつ濱田氏の指摘するとおり「この回の金氏の論は極めて特異な意義を持つものである。それは前の四十一回評より既に始まっ

ている事であり、行間評と呼応してなされている」のである。言うまでもなく、四十一回は九天玄女のくだりであり、濱田氏は、四十二回評という唐突さをもって、馬琴が金聖歎批判の根拠とした箇所から除外したが、九天玄女の重要性を考慮するならば、四十一回の内容を踏まえる四十二回評は、馬琴がぜひとも反論せねばならない箇所であったと考えられよう。

注21 天理図書館善本叢書『馬琴評答集』八木書店、S48・3。

注22 河竹繁俊『歌舞伎事典』（実業之日本社、S32・12）では、「もどり」を次のように説明する。

劇中で悪人役のような行動をしていたのが、実は善人で、後に本心を打ち明かす筋をいう。また事実悪人であったものが、あることから改心し、善人になることをもいう。「義経千本桜」の鮨屋の権太、「源平布引滝」三段目の瀬尾十郎など。

注23 菱岡憲司「馬琴読本における「もどり」典拠考」『読本研究新集』5、翰林書房、H16・10。

注24 〈もどり〉が描かれない馬琴読本としては、『高尾千字文』（寛政八年刊、中本五巻五冊）『敵討裏見葛葉』（文化四年刊、中本三巻三冊）『敵討枕石夜話』（文化五年刊、中本二巻二冊）『夢想兵衛胡蝶物語』（文化七年刊、九巻九冊）『青砥藤綱模稜案』（文化九年刊、十巻十冊）『近世説美少年録』（文政十二年～天保三年刊、三輯十五冊）が挙げられる。一見して明らかなのは、『高尾千字文』『敵討裏見葛葉』『苅萱後伝玉櫛笥』『敵討枕石夜話』の四作が中本型読本に類することであり、『夢想兵衛胡蝶物語』『青砥藤綱模稜案』も、それぞれ通常の物語構成の馬琴読本とは異なる内容を持つことである。『近世説美少年録』は長編であり、かつ時代がくだるのでいまは考察の対象とはなり得ないが、それにしても、『美少年録』の続編『新局玉石童子訓』には〈もどり〉は描かれている。すなわち、半紙本という書型と、通常の物語構成をとる馬琴読本においては、〈もどり〉は、かならず登場すると結論づけられる。

なお、言うまでもなく、近世演劇において〈もどり〉は、ごくありふれた趣向である。筆者がことさらに〈もどり〉をとりあげるのは、そこに特殊性を見出したいからではなく、反対に、馬琴、そして演劇にも親しんでいた読本の読者が、ごく当たり前にこの趣向を共有していることを確認したうえで、馬琴読本における悪人の結末の一類型を考察し、馬琴の水滸観との関連を見出したいからである。

注25 高田衛『江戸の悪霊祓い師』筑摩書房、H3・1。

注26 郡司由紀子「祐天上人の一代記を中心とする累説話の研究」お茶の水女子大学『国文』52、S55・1。

注27 井上敏幸「『死霊解脱物語聞書』攷」『読本研究』10上、H8・11。

注28 高田衛前掲書。

注29 柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』1、八木書店、H14・9。

注30 白木直也「諸本研究の立場より見たる滝沢馬琴の水滸観――水滸後伝との再会を契機に――」鳥居久靖先生華甲記念論集『中国の言語と文学』天理時報社、S47・12。

注31 濱田啓介「近世小説の水滸伝受容私見――『新編水滸画伝』と馬琴の金聖歎批判」前掲書。

注32 神田正行「『水滸伝』の諸本と馬琴」前掲書。

注33 この一つ書は、「俗語にくはしき人は、文字の穿鑿は行届キ候へ共、かやうの事は、夢にも知るまじく候。しらぬ故に、金

氏が評を、ひたものおもしろしとのみ申候。おもしろき事もあれど、当らぬ事も多く候。あはれ、余命といとまあらば細評して、小説ヲ好候仁をさましたきものに御座候。御一笑」と結ばれる。

なお、文政十一年三月二十日付殿村篠斎宛馬琴書簡（『馬琴書翰集成』1前掲）でも、「金聖嘆が『水滸伝』の評も素人評也。かくいへバ、尤をこがましく候へ共、シテと見物とハ、大ニ了簡ちがひ候」と、やはり実作者の立場で金聖歎を批判する。

注34　神田正行「馬琴の『水滸伝』再評価をめぐって――「古今独歩の作者」羅貫中の発見――」日本近世文学会平成二十年度春季大会発表、H20・6。

注35　濱田啓介「近世小説に於ける小説評論と馬琴の「半閒窓談」」前掲書。

注36　菱岡憲司「馬琴の「水滸三等観」の形成」日本近世文学会平成十八年度秋季発表、H18・11。

注37　日本近世文学会での発表後、徳田武氏よりも、「水滸三等観」は主題論であるため、人物論とは峻別する必要のある旨のご指摘をいただいた。

注38　播本眞一「馬琴の立場――儒・仏・老・神をめぐって」「文学」H16・5。

注39　早稲田大学資料影印叢書『馬琴評答集』5、早稲田大学出版部、H3・9。

注40　はやく文政三年の「詰金聖歎」の時点より「宋江等一百八賊、その本然の善に帰て、国の為に賊を討、奸を鋤に至れば、こゝまでが趣向の半体なり。必しも石碣の天降しをもて、結局とすべからず」と馬琴は述べる。これは宋江に「本然の善」を認めた箇所であるが、「こゝまでが趣向の半体」「結局とすべからず」との言葉が示すとおり、これは金聖歎の七十回本の構成に異を唱えるためになされたものであり、宋江について述べているからといって人物論と断ずることはできない。また「水滸隠微評」（天保三年成、注39に同じ）では、「水滸伝に三箇の隠微あり」と、馬琴は「水滸伝」に三つの「隠微」を読みとる。ひとつは、「当時世に出現の妖魔は一百一十ある事」すなわち百十より百八を引いて残る二人の妖魔は「一人は太尉高俅、又一人は晁蓋」であること。ふたつは「王進と史進とは師弟一体なりし事」。そして残るひとつが「宋江等百八人に初善中悪後忠の三等ある事」すなわち「水滸三等観」である。以上三つの「水滸伝」の隠微が、いずれも人物を論じながら構成と関係しており、やはり人物論と構成論の明確な線引きはできない。

注41　神田正行「『水滸伝』の諸本と馬琴」前掲書。

注42　佐藤悟「木村黙老著・曲亭馬琴補遺『水滸伝考』――解題と翻刻――」「実践国文学」52、H9・10。

注43　濱田啓介「八犬伝の構想に於ける対管領戦の意義」日本文学研究資料叢書『馬琴』有精堂、S49・12

注44　小津桂窓評・馬琴答評「侠客伝二集愚評」早稲田大学資料影印叢書『馬琴評答集』4、早稲田大学出版部、H2・15。

※本稿は、日本近世文学会（平成十八年度秋季）における発表「馬琴の「水滸三等観」の形成」にもとづく。席上、また前後にご教示を下さった多くの方々に御礼申し上げます。

（ひしおか　けんじ・本学大学院博士後期課程）